

戦争は教室から始まる！

戦後も歌わされる唱歌……なぜ？

「汽車 汽車 ポッポ ポッポ……」で始まる「汽車ポッポ」や、「昔々のその昔 椎の木林のすぐそばに…」の「お山の杉の子」、「われは海の子」といった戦前の唱歌たち。

曲名を聞いただけで、メロディーも口ずさめる方も多いと思います。

そういった戦前の文部省唱歌の歌詞をよくみると、そこには決まって“戦争”の推進や、“忠君愛国”思想が盛り込まれていたことがわかります。

「僕らも 手に手に 日の丸の旗を振って 送らしましょう
万歳 万歳 万歳 兵隊さん 兵隊さん 万々歳」（『汽車ポッポ』）

「ひっこめながらも考えた 何の負けるか 今に見ろ
大きくなって 国のため お役に立って見せまする 見せまする」（『お山の杉の子』）

このように戦争中の子どもたちを“少国民”に駆り立てた歌が、実は、戦後も歌い継がれています。その際、ちよつとの修正を加えて。たとえば「国のため」⇒「みんなのため」にしたり、

（戦争中）「体を鍛え 頑張って 頑張って
今にりっぱな兵隊さん 忠義孝行ひとすじに
お日様出る国 神の国／この日本を護りましょう 護りましょう」



（戦後）「スポーツ忘れず 頑張って 頑張って
すべてにりっぱな人となり 正しい生活一筋に
明るく楽しいこのお国 わが日本をつくりましょう つくりましょう」

他国に侵略し非道を働いた“お国”が奨励する「りっぱな人」「正しい生活」とは何なのか、戦後の出発点においては、そこをまず国全体で追及すべきだったのではないのでしょうか。しかし、戦争に対する反省の姿勢はあいまいにしたまま、戦後も文部省は、唱歌を子どもたちに歌わせています。

しかも戦後の文部省は、学習指導要領で、わざわざ教材として、戦争中につくられた唱歌を指定しています。他の教科は、教科書会社が自由に教材を選べるのにもかかわらず。

思わず口ずさみたくなる、親しみやすいメロディーの文部省唱歌は、半世紀以上経っても、人々の体に染みついていきます。

そうした唱歌を今の子どもたちに歌わせる“お国”の意図とは何なのか？ なぜ戦後60年を過ぎて今、「日の丸・君が代」を強制するのか？ なぜ反対する教員を処分するのか？ かつて、唱歌にのせられて“少国民”となった人たちが、戦争中に何をされたのか、させられたのか、を思い起こしつつ、ぜひ考えていただきたいのです。

東京都教育委員会は、上に対して従順で、無批判に従う人間を良しとして、子どもたち、教職員をがんじがらめにする政策を進めています。卒・入学式の「国歌斉唱」の際に「不起立」している教員たちは、かつての過ちを二度と繰り返したくないと、反対の意思を示しているのです。